

各講座の概要とテキストについて

2025年度上智大学区神学講座

テキストは事前に各自でご用意ください。

No.	講座名	講座の概要
1	聖年と「イエスのみこころ」	2025年はローマ・カトリック教会で「聖年」が開催されている。そして昨年2024年10月24日に教皇フランシスコによる新しい回勅『主は私たちを愛してください』(Dilexit nos) が公布された。この講座では聖年と「イエス・キリストのみこころ」のつながりを説明する。新しい回勅に書かれている内容を三つの要点にまとめれば以下になる。1. 「彼は私たちを愛してください」(ロマ8・37) ということへの驚嘆/2. 「心」の重要性の強調/3. イエス・キリストのみこころへの「深い畏敬の念」(信心) と「具体的な日常生活における奉仕」(奉仕) とを連続させること。この三点は教皇フランシスコ自身の人生経験におけるキリストとの出会いの実感に基づく。教皇は自分自身の霊的经验と社会実践との統合の努力に基づいて世界中のキリスト者たちをキリストに出会わせる。
2	ヨハネ福音書を読む	本講座では、再構成されたヨハネ共同体の歴史的変遷からヨハネ福音書の編集および全体構造を知るとともに、ヨハネ福音書の主なエピソードを取り上げながら福音書の全体像を把握し、福音書の強調点・要点を理解することを目的とする。講師自身が聖書学者ではなく現場の教会の司牧者であり、聖書のメッセージを信者に語る立場であることから、初級・一般学習者にとって出来るだけ分かりやすくお話ししたい。 なお講座には各自聖書を持参のこと。 テキスト：『聖書』 参考図書：R. E. ブラウン著『ヨハネ共同体の神学とその史の変遷-イエスに愛された弟子の共同体の軌跡』 ISBN：978-4-902211-32-0、『解説 ヨハネ福音書・ヨハネの手紙』(2008年、教友社) ISBN：978-4-902211-40-5
3	キリスト教の誕生	キリスト教は、ユダヤ教を母胎として誕生した宗教であるが、両者の関係は分かりにくい。本講座では、宗教史の観点から古代イスラエルの人々の信仰がいかなる過程を経てキリスト教という宗教を誕生させたかを考察する。拝一神教から唯一神教へ、メシア待望とヘレニズムの影響、ユダヤ教からの分離とパウロが果たした役割など、聖書の記述に従いながら、歴史に沿ってキリスト教誕生の過程を論じる。それにより、宗教としてのキリスト教の本質に迫るとともに、キリスト教や聖書について教えたり、語る場合に重要な旧約聖書と新約聖書の関係についても改めて考えてみたい。 テキスト：『聖書』(新共同訳に従って講義するが、他の翻訳聖書でも構わない。)
4	宗教科教育法25-1「教員の霊的養成」	本講座は、ゲストを招いて教員の霊的養成について学び・体験する講座である。ミッションスクールの教員は、キリスト教の知識だけでなく、イエス・キリストとのパーソナルな出会いを深める生き方に招かれている。この霊的養成の基盤は祈りとなることから、本講座では祈りの理論と共に聖堂での祈りの体験を行う。特にイエス・キリストを伝える科目を担う教員の中核は自らの体験であり、その体験を内省し言語化する営み、さらに児童・生徒の声を聞く力、伝える力が求められる。本講座は宗教科免許の取得を目指す方だけでなく、免許既得者、他教科担当者、教会学校リーダーなどに向けても開かれている。主な内容は、①教員の霊性、②祈りの体験(聖堂)、③キリスト教の人間観・世界観、④授業展開の事例提示、⑤霊におけるシノドス会話など。
5	宗教科教育法25-2「カトリック教育とその方法」	カトリック学校における宗教科の授業では、どのようにキリスト教のメッセージの核心を語り得るのでしょうか。現在、この「伝え方」については様々な語り方や手法を踏まえた諸実践の可能性が開かれています。本講座ではこの「伝え方」に焦点を当てて、①聖書を用いた方法、②聖書以外のテキストを用いた方法、③キリスト教外のコンテキストと接続する方法の3点を具体的かつ協働的に学ぶことを通して、カトリック学校の宗教科の実践者としてのコンビテンシーを身に着けることを目指します。
6	「創世記を読む」ーキリスト教の人間観	旧約聖書は、古代ユダヤ教の知識人がイスラエルの国家再建を意図して編集した文書群です。その冒頭の創世記には、「原初史」と呼ばれるテキスト単位があります(創世記1章～11章)。原初史の物語の特徴は、イスラエルという特定の国の歴史ではなく、全宇宙と人類の由来が語られている点に、また、そのことと並行して「人間とは何か」という主題が考察されている点にあります。それゆえに、旧約聖書を正典の一部として受容したキリスト教の伝統を通して、創世記は人間論の古典中の古典として読み継がれてきました。本講座では、特に創世記の原初史の物語の分析を通して、キリスト教の人間観の本質を学びます。 テキスト：『新共同訳聖書』や『聖書協会共同訳』など、聖書の邦訳。
7	キリスト教と日本思想	本講座は、キリスト教と日本思想とを比較し、両者の対話について考える授業である。とりわけ、この授業では、日本仏教の諸宗派(真言宗、天台宗、浄土宗、浄土真宗、臨済宗、曹洞宗、日蓮宗)の思想を紹介し、その上で、キリスト教と日本仏教の諸宗派の思想とを比較する。そして、最終的にどのようにキリスト教と日本仏教の諸宗派の思想との対話が可能であるのかを考察してみたい。 テキスト：角田佑一『教義と歴史から理解する 入門・世界の宗教』 ミネルヴァ書房 2024年 定価(本体2700円+税) ISBN 978-4-623-09610-7

8	マリアの神学と霊性	マリア論はカトリック神学において、キリスト論・神学的人間論・教会論・秘跡論など教義神学諸科目が交差する交差点に位置している。しかし同時に、エキュメニカルな対話における困難さや、民間信心や文化における発展、キリスト教における女性理解への大きな影響など複雑な面も有している。この講座ではマリアについて神学的理解、特に教義の意義とその歴史的背景について深め、その霊性の豊かさに触れつつ、現代社会、特に日本におけるマリア論の可能性を探っていく。また多くのカトリック校がマリアに関する校名や校訓を有していることから、「学校教育におけるマリア」という点についても考察していきたい。
9	J. H. ニューマンの思想と宗教教育	本講座は、カトリック学校、キリスト教学校において、宗教とはいかなるものか、またそれを、どのように児童・生徒・学生に伝えていけばよいのかという根本的な問いを、キリスト教思想史を参照しながら受講生の皆様と共に考え、深めることを目的としている。とりわけ、19世紀イギリスを代表する思想家であるジョン・ヘンリー・ニューマンは、固定化された教義や儀式ではなく、生徒・学生にとって宗教が生きたものとなるようにと心を砕き、教育と司牧に尽力した。本講座では、ニューマンの思想を一つの手がかりに、宗教教育における「宗教」の意味を問い直していきたい。
10	宗教科教育法25-3 「いのちの教育」	本講座はカトリック・ミッションスクールの「宗教」の授業に必要な知識と技法を学び、適切な授業を行う実践力を養うことを目的とする。キリスト教の人間観を軸として、人間のいのちについて誕生から死に至るまで、現代の諸課題を取り上げながら展開する。道徳教育の教科化や学習指導要領の改訂に伴う学習観の変化にも着目し、「道徳」の項目と宗教教育の連続性と非連続性についても検討する。本講座は講義だけでなく、個人作業、ペアワーク、グループワークを適宜行いながら、より良い授業を受講生と共に対話的に探究する講座である。主な内容は①キリスト教の人間観、②「特別の教科 道徳」におけるいのちへの畏敬の念、③カリキュラムと評価：コンピテンシーと評価からの単元設計、④聖書へのアプローチ方法：聖書をどのように生徒に伝えるか。⑤ゲストによる模擬授業とグループディスカッション。
11	愛の思想史1アリストテレス『ニコマコス倫理学』	「愛の宗教」と言われるキリスト教を的確に理解するためには、「愛」についての思想史をバランスよく理解することが不可欠です。この講座では、このような観点から、西洋における「愛」の思想史の中から、重要なテキストを厳選し、丁寧にわかりやすく読み解いていきたいと思ひます。今回は、古代ギリシアの哲学者アリストテレス（前384-322）の『ニコマコス倫理学』の基本的な人間観を、「愛」の問題を軸に深く考察していきます。カトリック神学の一大頂点であるトマス・アクィナス（1225-1274頃）の『神学大全』は『ニコマコス倫理学』から多大な影響を受けていますので、今回の内容は、カトリックの神学を的確に理解するための大きな手がかりともなります。 テキスト：山本芳久 『宗教のきほん「愛」の思想史』 NHK出版 定価（本体1,800円＋税）ISBN 978-4-14-081908-1
12	宗教科教育法25-4 「カトリック教育哲学の諸相」	「世俗の時代」といわれる現代社会において、カトリック教育を行うとはどのようなことを意味するのでしょうか。「カトリック教育」という領域の輪郭を捉えるためにはどのようなアプローチをすることができるのでしょうか。本講座ではこういった問いから出発し、その教育哲学的側面を掘り下げ、協働的に検討することを通して各受講者が教育者として「カトリック教育」の輪郭を縁取り、主体的にイメージすることができるようになることを目的とします。そのために、①現代社会の諸性格の分析、②カトリック教育の教育哲学的基礎づけの検討、③現代的なアプローチの可能性を扱います。
13	秘跡各論 B「ゆるしの秘跡」	ローマ・カトリック教会における「ゆるしの秘跡」は当教会の七つの秘跡のうちの一つです。マタイ福音書16章18節～19節は「告解」や「ゆるしと和解の秘跡」ともいう「ゆるしの秘跡」の聖書的根拠です。この秘跡は、洗礼以後の罪のため神から遠ざかったことを痛悔し告白する人に対し、イエス・キリストが教会の役務者（司祭）を通してゆるしと成義の恩恵を与える儀式であると定義することができます。ゆるしの秘跡の歴史的発展（聖書、教父、スコラ神学、近代・現代神学）を先ず追ってから、上述した定義に基づいてこの秘跡を構成する要素並びにそれらの意味を体系的に説明します。
14	西欧近世哲学における宗教・キリスト教	大航海時代の到来、ルネサンス、宗教改革およびそれに伴う宗教戦争、科学革命がもたらした科学的世界観——。以上のような一連の出来事・事象は、中世の西欧ヨーロッパで確立されたキリスト教とその権威を徐々に、しかし確実に相対化・弱体化させていった。このような状況下において、近世の哲学者たちは、中世世界において哲学と蜜月な関係を築いていたキリスト教をどのように扱い、宗教・キリスト教に対してどのような哲学的思索を展開したのであろうか。本講座では、スピノザやロック、カントといった西欧近世を代表する哲学者を取り上げ、彼らの宗教・キリスト教理解について概観する。